第１回セミナーを４月２２日(土)13:30～15:30 に開催しました。参加者の皆さんよりお預かりしたリフレクションをまとめました。

会　場：愛知文教大学　２０１教室

テーマ：「子どもの学びをどうとらえるか？～授業記録による授業分析の方法～」

講　師：名古屋大学大学院 教授　柴田　好章 先生

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、授業の事実をもとに授業研究を行うことです。 校内の授業研究のあり方を今後どのようにしていくかということのヒントをたくさんいただいた。まずは、授業者がどのような授業をしたいかを授業研究の前に共有しておくことが大切だと感じた。また、授業におけるグループ活動が予選━決勝のような トーナメント方式になっていないかと言う指摘は、自分自身とても考えさせられた。
今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、教職専門職としての Reflection と Collaboration ということです。 授業分析の重要性を再認識させられました。授業研究当日の焦点は、子どもの学び合いという点の重要性を痛感しました。授業を分析するとなると、教育専門職としての学び合いをどう分析していくのかも、新たな課題になると、話を聞きながら感じていました。「子どもの学び」と「教師の学び」は相似形とも言われています。そんな意味からも、授業分析が重要になってくるのだと思いました。主体的・対話的で深い学びと言われている中、グループでのコミュニケーションの時間が多くなってきている現状、それらのグループ内での学びをどのように記録していけばよいのかという疑問がでてきました。これからも、授業を見ながら考えていきたいと思います。有意義な時間を過ごすことができたことに感謝しています。
今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、授業から学ぶ、逐語記録から学ぶです。 柴田先生ありがとうございました。授業で学ぶ教師の会がお休み中とのお話がありました。なつかしく思いました。それまで自分は授業ライブ、授業ビデオを媒介に學んでいました。逐語記録から学ぶ、この会における、とても苦しい経験、協同の学びと自己組織化の記憶がいま自分の中で生きていると思います。 自分で読んで、みんなで音読して、自分で読み描いて、自分で考えて（自分ですることとひとりですることはちがう)、自分で表現して、聴いてもらい、差異から読み深め、学びを深めていくのを何年間も体感しました。昨年度は授業研究会のたびに逐語記録をつくり授業者等に送り、学び合おうとしましたが結局、力足らずに終わりました。 柴田先生がおっしゃったように、逐語記録をつくる中でたくさんの発見がありました。さらに学び合えればと思ってちょっと残念でした。以前に比べて逐語記録がつくりやすくなっていますが現場での利用は少なくなっているように思います。 この時代、最終的には、教師論や学校の存在論につながることのように思っています。 セミナーでいつものように新しい視点を加えつつ学び合う学びを分かりやすくお伝えいただき、ありがとうございました。reflection と collaboration の意識を高め、さらに学びを深めたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。
今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、本セミナーは、授業分析を理解し

やすいように具体例を取り入れるだけではなく、時に聴衆の笑いを誘い、主体的に参加したいと思える穏やかな雰囲気でした。このことは、授業においても重要な観点だと考えます。

本セミナーにおいて、授業分析においては子どもの内側に入ること、子どもを幅で捉えること、事実と解釈のプロセスを螺旋状につなげるためには分析の視点を大切にすること、そして事実と解釈を往復することで妥当性を高めることが、重要だと再認識しました。

学び合う学び研究所の皆様、美味しいお菓子や貴重なセミナーを開催して頂き感謝申し上げます。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、授業研究は参加型で行うです。

授業研究の記録を教材として、みんなで話し合って授業をよくしていくことがやはり必要だということを学びました。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、「しかたない」に注意することです。

授業研究の意味や意義を改めて学び直すよい機会をいただきました。「コロナだからしかたない」「〇〇だからしかたない」では何も進まない、Collaboration ならないというお話しは、とても印象的でした。いつも「しかたない」と言っては、自分を納得させたり言い訳にしてきた自分に向けたお話しのようで、諦めず一歩でも頑張って深めよう、力を合わせようという気持ちにさせていただきました。

また、「ガでもチョウみたいに糸はついているけど」の「けど」と言った子どもの真意や、問題の答えに至った経緯が何かなど、子どもの微妙な心理を授業記録から読み取ることは大切さだと思いました。その積み重ねが、瞬間を逃さず次の一手を打つことにつながり、子どもが見える教師に近づくことになると学ばせていただきました。

柴田先生の語りには、毎回知らぬ間に引き込まれてしまいます。今日もそうでした。学術的な言葉も、日常の一こまを当てはめて例えてくださることで、想像が膨らみます。授業という場に置き換えることも楽しくできました。ありがとうございます。

前半は授業研究に関してでした。その中で一番心に残ったのは、「専門職としての議論を」ということです。教師の指導法ばかりを語る批評会はもちろん授業研究嫌いを作りますが、一方で子どものことばかりを語ってもなかなか成長に繋がらないのではないでしょうか。そういう点で、柴田先生の「専門職としての議論を」というご指摘は、奥深い視点だと思いました。私自身は、専門職として主に二つの観点があると考えています。一つは、教師として「児童生徒をどう見るか」です。授業を見ながら、或いは授業しながら、目の前の児童生徒に何が起きているのか（WHAT)、それはどこからきているものなのか（WHY)、を見る目を養いたいと思っています。が、これがなかなか容易ではありません。だからこそ、授業研究で多くの先生がたの見方をお聞きし、「ああ、そう見えるのか」という経験を積むことが大切だと思います。もう一つは、「教材や課題をどう見るか」です。教科の専門性でありオーセンティックな学びにつながる見方であると考えます。本時の教材のもつ価値は何か（WHAT)、どう出会わせたらよいのか（HOW)、どこにつながるのか（WHERE）目とでもいうのでしょうか。中学校であると「専門教科外だから」という言葉で片付けられてしまうことも多々ありますが、それでは情けない。たとえ専門教科外であっても、「教材」のもつ価値や課題の妥当性は見つけられる目をもちたいと、自分自身にいいきかせています。それが教師として

の専門性ではないかと・・。

後半は学び合う学びに関してでした。学びの主役は児童生徒、生徒エージェンシーを、となればなるほど、学びの場や自分の居場所をつくるのは児童生徒自身なんだろうなと最近は思うようになってきました。ちょっと前までは「学びの独りぼっちをつくらない」を子どもたちとの合言葉にしてきましたが、最近はそれに加えて「学びの独りぼっちにならない」も大切なことだと日々語っています。「わからない、教えて」「答えじゃなくてやり方やヒントを頂戴」「〇〇ちゃんの考え、いいなと思うから真似してみよう」「自分と違っていていいな」「もう一回自分で考えてみよう、やってみよう」も全部ここにつながると思います。柴田先生のお話を伺いながら、「そういう生徒になってほしい（ありたい姿)」がより具体的になりました。明日から、またありのままの姿とのギャップをどう埋めるかを試行錯誤していきます。ありがとうございました。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、教師自身の専門職としての自立です。

とかく授業者の力量向上のために授業研究が行わる傾向がある中、「授業研究は子ども理解である」というメッセージには、心を打たれました。また、名古屋大学における授業分析の歴史を改めて振り返った時、重松先生が言われた「教育における民主化の一つの鍵が、教師が行う研究活動であり、それは教師自身に専門職としての自立をもたらすことができる」という言葉の意味が、今の自分にすごく勇気を与えてくれるような気がしました。教師のプロフェッショナルとしての専門性は、教師同士の学び合い無くして高まりません。そのことを、現場の皆さんと共有していきたいと思いました。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、学校における授業研究の「参加型モデル」の構築と授業分析のあり方です。

目指すべき授業研究の方向性を示していただけたような時間でした。この職員にしかできない学び、この子どもたちにしかできない学びを、追求していきたいと強く感じました。

こんなにも近くで、こんな素晴らしい講義を聴く事ができ、とても心強く感じました。次回は本校職員も連れて、参加したいと思います。

ありがとうございました。今後もどうぞよろしくお願いします。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、子どもを「ありのままの姿」から「ありたい姿」に向かっていく「なりつつある姿」として幅を持ってとらえる　という事です。

わからない→わかる　に向かっている、向かおうとしている事を大切にしている事が教室で共有されるようにするために教師として何が出来るか考えていきたいと思います。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、「この子だから仕方ない」で終わらせない、次に繋がる授業研究行うことが大切だとわかった。

講義の中で逐語記録を読んだことがあるが、それは何を目標にして研究されていたのか、どういう方向に持っていきたかったのか、ということを改めて理解することができた。今回のセミナーを通して、今までの学びの点と点が線で繋がったので、参加することができ大変良かった。

グループ内で交流した時に、「グループワークを多めにして生徒主体の授業を展開したら、

分からない子を中心に、前の形式の方が良かったという声があった」という話があった。ただ新しいやり方で授業をすれば、それが最適かというとそうとは限らない。

様々な方法のメリットデメリットを考えながら、授業研究についてもさらに学んでいきたい。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、児童生徒を理解することのできる力です。

48 歳のとき、私が勤務している小学校に、的場先生と柴田先生がご指導に来て下さり、権威ではなく子どもたちの学びの姿から学ぶことの重要性を学びました。そして、51 歳で、大学院に入り、子どもたちの学びの姿から学ぶことについて 12 年間学びました。卒業後の現在も学んでいます。

しかし、先週、大学３年生３人と、逐語記録を読む機会がありました。私を含めて３人が教師の発問に対しての分析をしました。そして、4 人目の学生が、子どもたちの学びの姿をもとに発言をしました。

衝撃を受けました。「今まで何を勉強してきたのか。基本である子どもたちの学びの姿に目を向けずに、教師の発問に目を向けてしまった。」と深く反省しました。

逐語記録の中で、子どもたちの発言に目を向けることは、エネルギーが必要であり、技術が必要であると思います。子どもたちの発言には、言われていない内容があり、それを捕捉することが必要です。そして、前後の文脈から、子どもたちが何を問題にして話し合っているのかを読み取り、また逐語記録の遠く離れた場所にある、前後の発言をたどることが必要です。逐語記録に真摯に向き合うことが求められます。

一方、教師の発言は、その言葉だけの読み取りだけでも分析ができたような気がし、発言することができます。いつのまにか権威的な見方で、授業や逐語記録に接しているんだと思います。この授業はわかっているといった奢りの考えがあるとき、教師の発問に目を向けてしまうのです。

子どもたちの学びの姿から学ぶことは、大変難しく修行の必要なことです。これからも修行が続きそうです。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、幅でとらえるということです。

普段の授業とは違い、学校の先生に向けた実践的な事例が、とても分かりやすかったです。つい、「ありたい姿」でとらえてしまいますが、「ありのままの姿」も大切だということが、とても印象に残っています。

今回の柴田先生によるセミナーでは、「授業分析」の持つ意味が強調されていました。

これが出てきた歴史的背景から実施する上での留意点まで、網羅されていました。現在の「授業研究」の中で、「授業分析」は必ずしも正当に評価されているわけではありません。その原因（批判）の一つとして、速記や録音でしか記録できなかった時代とは違って現在は録画が可能な時代になっている。それなのに、逐語記録という形で音声記録だけに頼っているのは時代遅れではないか、というものがあります。

確かに、事実に基づくための記録が文字記録であり、それは授業の全体ではありません。ただ、記録手段ばかりではなく、（子供とは限らない）人間の思考と言語が全く同一とは言えません。（時間をかけた音声表現、文字表現でも、自分の本当に伝えたいものになっていない

ことは、我々が常に痛感していることです。）

全体の中で言語を文字化した記録だけでも、本人の思考そのものとは言えません。ところが、その限られた記録でも、解釈してみると妥当性の確定には問題が残ります。記録の不完全性よりも、その限定された記録を解釈する行為の過程の中でこそ、授業の事実に迫る経験ができ、授業の本質や改革につながる、という点がもっと認められるとよいなと感じました。